

第五章 勝山町の城郭遺構

第一節 序

勝山町のある行橋平野は、古代から豊前国の国府が置かれ、政治の中心として栄えた。

中世になると、宇都宮氏、新田氏の一族などが、京都郡各地に城砦を築き勢力を振るった。

城といえ、高い石垣、深い堀、壮大な天守閣を持つ姫路城、小倉城、中津城などを連想するが、これらは近世（江戸時代）の城であり、中世（平安末期から戦国時代まで）の城は、近世の城のような立派なものでなく、ほとんどが山城であり、関係文書には「掻き揚げ」「切寄」などと書かれている場合もある。

山城は、天然の要害を主として、これに土塁や空堀などの人工を加えて牙城としたもので、勝山町周辺には一〇をこす城跡が残っている。

勝山町や周辺部には、山城の代表ともいえる障子ヶ岳城や馬ヶ岳城があり、土塁、堀切などの遺構をよく残している。

勝山町の二城跡と、周辺の城跡四か所、計六城跡についてま

とめてみた。なお各城跡については、文書や伝承などの城名の分かる場合はそれを記し、不明の場合は所在地名を冠した。

第二節 勝山町の古城跡

一 障子ヶ岳城 京都郡勝山町松田

勝山町の西はずれ、田川郡と京都郡との郡境の山並みに、山頂が五段に削平された山がある。

標高四二七メートル、戦略上要衝の地であるために、幾度かの攻防が繰り返された障子ヶ岳城の跡である。

牙城跡とも呼ばれ、山頂の雑木が伐採されて中世の山城の姿が稜線に見事に再現されている。

昭和六十三年「城攻め」事業と称して勝山町民七〇〇人によるボランティア活動によって整備されたものである。

以後、毎年、春秋など年四回ほど、田川郡香春町、京都郡勝山町の両町の人々の協力で草刈りを実施している。

地元の人々が、郷土の誇りとして、史跡や文化財を大切にしているためである。

城跡は、本丸、二の丸、馬場（馬屋跡ともいう）、北の丸等の五つの曲輪からなる。

本丸は、標高四二七メートルの最高部に位置し、東西二二メートル、南北



写真4—22 障子ヶ岳城遠望（一の砦跡より）



写真4—23 障子ヶ岳城本丸を望む（北の丸より）



写真4—24 障子ヶ岳城本丸を望む（馬場から）

しかし、正平二十三、応安元年（一三六八）、千葉上総介光胤が足利統氏を討ち、千葉氏の居城となった。

千葉氏は南朝方につき、この時期、九州では南朝方優勢の中での出来事であった。

『豊陽古城記』

応永六年（一三九九）正月元旦、城主千葉上総介高胤は、元旦の慶賀として一族老

臣を城内に集め祝いの宴を開いていた。

当日、北九州地方は大雪であった。ところが、突如として大内盛見率いる大内の大軍が、城の北、南の二手より雪に足をとられ、難儀しながら攻めのぼってきた。

攻城軍は、鬨の声をあげ攻め寄せた。不意を突かれ城内は、上を下への大混乱となった。

高胤は、わずか三〇余騎の家臣に護られ、西の門より落ちのびた。障子ヶ岳落城が応永戦乱の始まりである。

応永五年（一三九八）十月、豊後の守護職大友親世が在京の時、親世の一族大友氏鑑が兵を挙げ豊前に侵入した。

原因は、守護職大友刑部大輔氏時の死去による家督相続

三〇ほどの広さで、城台の周囲に高さ一丈余りの土塁をめぐらし、土塁の外側の城壁には胸をつくような急傾斜の胸壁を残し、外からの侵入を阻む工夫がなされている。

元弘三年（一三三三）、鎌倉幕府は滅び、後醍醐天皇による建武の新政が始まる。しかし、足利尊氏は、後醍醐天皇に謀反を起こし挙兵する。戦いに敗れた尊氏は、九州に敗走し大友・少弐・宗像氏などの助けを受けて再起を図り、多々良浜（福岡市東区）の戦いで菊池・阿蘇の連合軍を破り上京、京都を占領した。ここに、南北朝内乱の幕開けとなった。

この時、足利尊氏の一族足利統氏は、豊前の守りとして障子ヶ岳城を築き、居城とした。

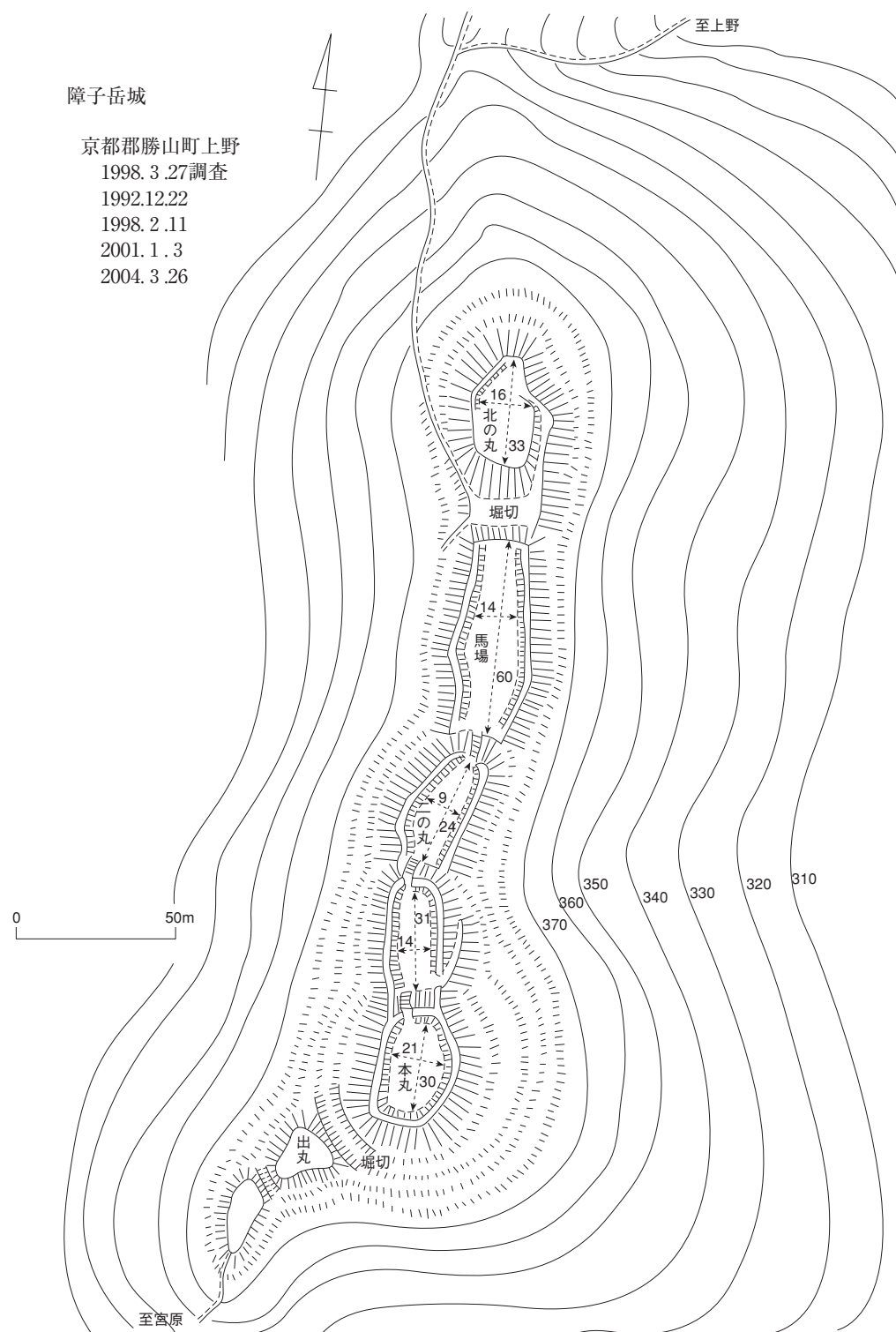


図4—5 障子ヶ岳城

で、氏時の嫡男左近将監^{さこんしょうげんうじあきつ}氏鑑^{しけん}が当然、守護職を継ぐと見られていた。

しかし、三代將軍足利義満の命令で、氏時の甥式部大輔^{しきぶたゆうしかよ}親世が後継者となった。

大友親世の奥方は大内義弘の妹である。大友家の家督相続に義弘の画策があった。豊前の諸城主は氏鑑に同情し、千葉高胤も大友方に加わった。

豊前の守護職は、大内義弘である。このために義弘の弟大内盛見^{もりはる}を将とする大内勢の攻撃を受けた。

戦国時代は、大内氏の持城となり、門司左近将監^{もんじさこんしょうげん}国親^{くにちか}や長岡大炊允^{ながおおいのじようさねかつ}実勝^{じつかつ}らの大内氏の家臣が城番となつて城を守った。

天正十四年（一五八六）、豊臣秀吉が九州平定の軍を九州に派遣、先鋒毛利勢に香春岳城の支城小倉城を落とされて、高橋元種は降伏し、城兵は香春岳に退いた。

豊前各地の諸将も相次いで秀吉軍に下り、人質を出した。

ところが、島津が大軍を率いて北上してくると、元種はこれに呼応し香春岳によって秀吉軍に相対した。

秀吉軍は、十一月七日宇留津城^{うりづ}（築上郡椎田町宇留津）を攻め落とし、十一月十五日障子ヶ岳城の攻略に取りかかり攻め落としした。戦国時代の末期のこの時期、障子ヶ岳城は、香春岳城の支城となつていたのである。

香春岳から見えない京都・仲津郡^{なかつ}や周防灘^{すおうなだ}の様子を知るため

には、障子ヶ岳城が絶好の場所にあった。

天正十五年（一五八七）障子ヶ岳城は秀吉の宿舎となつたと伝えられるが、天正十七年（一五八九）豊前の名城といわれた当城も廃城破却されてしまった。

二 岩隈城^{いわくまじょう} 京都郡勝山町岩熊

勝山町役場の北西、約三キロほどの諫山^{いさやま}小学校の東に隣接している、標高五〇メートルほどの小高い通称小倉山の頂上が城跡である。

小学校の東、プール脇に、城跡への登り道がある。

山頂は、東西に一二メートル、南北二〇メートル、高さ五メートルほどの楕円形台地で、城台の形をよく残している。特に五メートルほどの切岸は見ごとである。ここが主郭で、城台の西側と東側に高さ五〇メートルほどの土塁が残っている。

主郭の周囲には、幅五メートルほどの腰曲輪^{こしるわ}が取り囲み、北側には、高さ一メートルほどの土塁が残っている。

城台の南は、四段の曲輪が



写真4—25 岩隈城の城台